広報 すぎなみ

Suginami

支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

10/15
令和3年（2021年）
No.2313

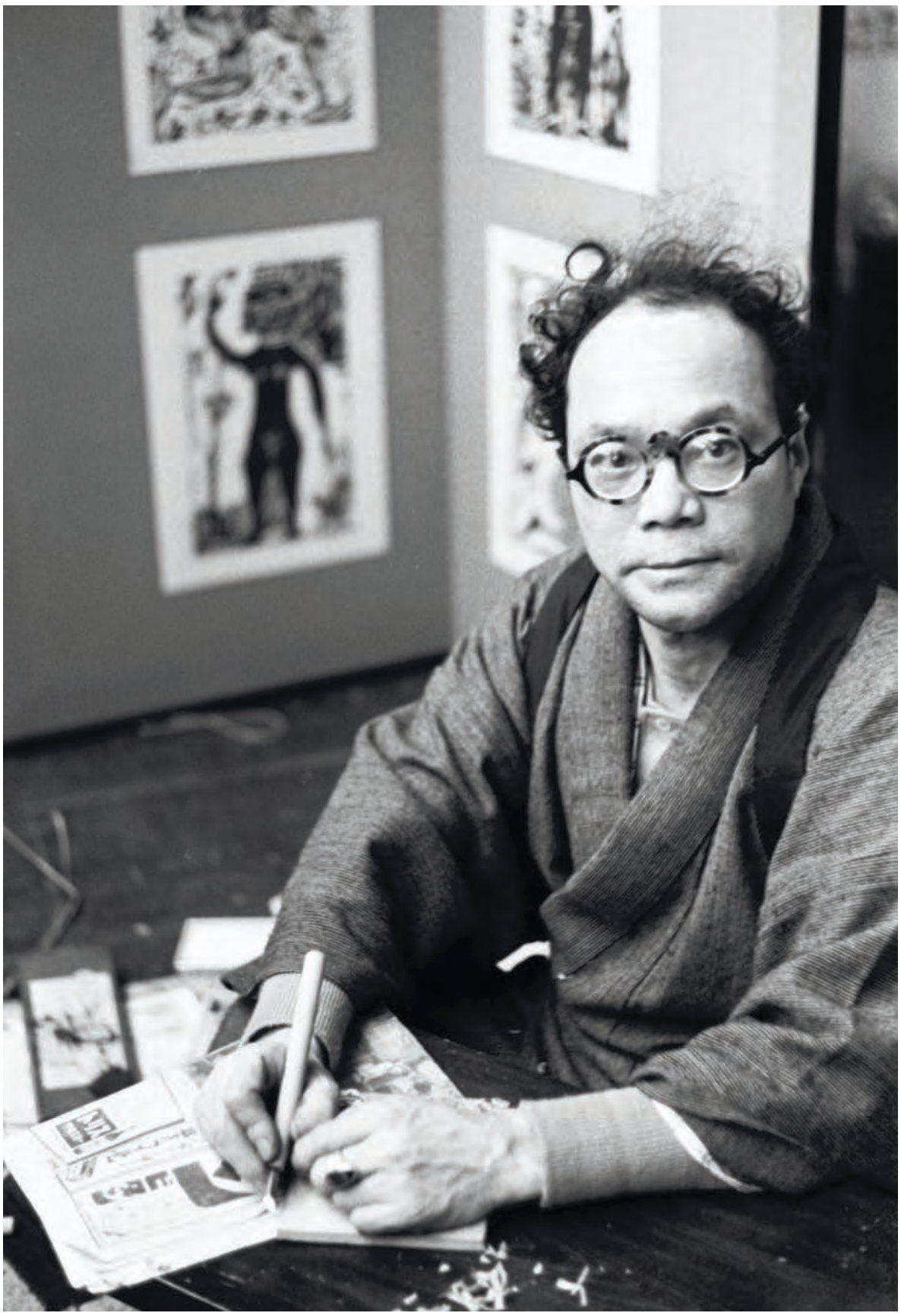
世界のムナカタ、その魅力に迫る。

唯一無二の芸術性で見る人を惹（ひ）きつける――棟方志功は20世紀の美術界を代表する世界的巨匠の一人であり、その作品は今なお色あせない魅力を放ち続けています。昭和26年から荻窪の地に居を構え、生涯作品と向き合い続けた棟方志功。区で開催される特別展とサミットを前に、研究家であり孫である石井頼子さんが、棟方作品の魅力や祖父との思い出を語ります。

特集
すぎなみビト

棟方志功

｜1903～1975｜



写真：原田忠茂（撮影：昭和30年）

Contents ―主な記事―

6｜11月12日㈮～25日㈭は「女性に対する暴力をなくす運動」期間です　8｜読書の秋は図書館へ　16｜新型コロナワクチン　2回目接種率が約65%になりました

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 ｜ 3312-2111（代表）FAX 3312-9911（広報課直通） ｜ 区ホームページ：https://www.city.suginami.tokyo.jp/ ｜ 発行：杉並区 ｜ 編集：広報課

お知らせ　新型コロナウイルスの感染状況によっては、本紙掲載の催し等が中止になる場合があります。

広報すぎなみは月２回（１・15日）発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。

すぎなみビト

棟方 志功

| 1903～1975 |

棟方志功（むなかた・しこう） 明治36年、青森県青森市に生まれる。油絵画家を目指して上京した後、版画家・川上澄生の作品に惹かれ木版画の制作を開始。中野区大和町を拠点に独自の版画観を深めていく。戦中～戦後の数年間を疎開先の富山県福光町（現・南砺市）で過ごし、昭和26年から荻窪にアトリエ兼自宅を構える。昭和30年、第3回サンパウロ・ビエンナーレ国際美術展に板画「湧然する女者達々」などを出品し、版画部門の最高賞を受賞。昭和31年、第28回ベネチア・ビエンナーレ国際美術展に板画「二菩薩釈迦十大弟子」などを出品し、国際版画大賞受賞。昭和45年に文化勲章受章。昭和50年、上荻の自宅で死去。享年72歳。

石井頼子（いしい・よりこ） 棟方志功の長女・けようの娘として生誕。小学2年～中学2年の期間、荻窪の家で祖父と共に暮らした。現在は研究家として、展覧会の監修、執筆、講演会などを通して棟方志功の魅力を発信している。11月開催の棟方志功サミットでも講演予定。

荻窪の家のアトリエにて（写真：原田忠茂／撮影：昭和28年）

「棟方志功サミット in 杉並」記念特別展

棟方志功と杉並 ―「荻窪の家」と「本の仕事」

10月30日㈯～12月5日㈰ 午前9時～午後5時

場　所 ｜ 郷土博物館（大宮1-20-8）、郷土博物館分館（天沼3-23-1天沼弁天池公園内）
費　用 ｜ 本館100円（観覧料。中学生以下無料）。分館無料
その他 ｜ 月曜日、11月18日㈭休館

昭和31年のベネチア・ビエンナーレ国際美術展でグランプリを受賞した「柳緑花紅頌」などの作品のほか、創作の舞台となった「荻窪の家」の俯瞰図、観音像が描かれたトイレの再現、写真家・原田忠茂氏が撮影した棟方志功、挿絵や装丁などの「本の仕事」を通し、棟方と杉並との関わりや幅広い「芸業」を紹介します。

荻窪の家のトイレを再現します！

トイレの壁に描かれた「雪隠観音」
（写真：原田忠茂／撮影：昭和30年）

関連イベント

- ●映画上映「彫る　棟方志功の世界」 ●ギャラリートーク
- ●ワークショップ「棟方志功の『板画』体験」

問 郷土博物館☎3317-0841、郷土博物館分館☎5347-9801

「棟方志功サミット in 杉並」

棟方志功研究家・石井頼子氏による基調講演と、棟方ゆかりの自治体の首長によるパネルディスカッションを行います。

時 11月28日㈰午前10時～正午　場 勤労福祉会館（桃井4-3-2）　定 50名（抽選）　申 往復はがき・Eメール（12面記入例）で、11月16日（必着）までに郷土博物館（〒168-0061大宮1-20-8 ✉kyodo-m@city.suginami.lg.jp）　問 文化・交流課

全ての常識を覆す、破格の作品群。その世界 観を芯で支えていたものとは

とにかく描きたいから描く。それが芸術家としての出発点

ゴッホに感銘を受けて画家を志し、後に木版画を始めた棟方志功。一度目にすると忘れられない、無類の世界観を放つのがその作品の特徴です。とにかく何もかもが破格。一般常識、一般的な版画、そういったもの全てを覆した人だったのではないでしょうか。

その世界観を作り上げているのは、「体に染み込んだ自然の景色・宗教性・文学性」の三本柱です。青森時代、棟方は外の風景を描きに描きました。繰り返しの中で、自然の姿がおのずと体に染み込んでいきました。そのおかげで板画（棟方は自らの木版画を「板画」と記しました）を始めた時、何も見ずとも描きたい自然を何でも表現できたのです。棟方を象徴するモチーフの一つ「観音」や「女人像」などに見られる宗教性も、おそらくルーツは「青森時代」。信心深い祖母に育てられた棟方は、幼児期にはすでに般若心経をそらで唱えていたといいます。極めてプリミティブな宗教観が、幼い頃から心身に培われていたのでしょう。そして、子どもの頃から揺るぎなく、文学を愛したのが棟方でした。

棟方の芸術家としての出発点は「とにかく描きたいから描く。やりたいものをやる」という精神にあります。先の三本柱を芯に、「好きだ」という一心で繰り返し描いたからこそ、理屈ではない無垢な感性で作品を生み続けていくことができたのです。棟方には「青森から世界へ」という発想がありましたが、成功の背景にはさまざまな土地での着実な歩みがあります。特に疎開先の富山県福光町での6年間はこれまであまりその重要性が語られてきませんでしたが、棟方にとって非常に大切な期間だったと言えるでしょう。戦後、木端のような小さな板しか手に入らない中、小さな板でもできる板画本の制作にいそしみ、技術力を磨いたのがこの時期です。そして板のありがたさを痛感したことで、「無駄に彫らない。板に対してできるだけ少ない線で彫る」という方向へ進んでいきました。この「福光時代」に得たことが、その後の荻窪での怒涛の時代につながっているのです。

荻窪の家の門を通る棟方（写真：原田忠茂／撮影：昭和28年）

荻窪の家のアトリエで作業する、その背中が大好きだった

私自身は祖父である棟方と、中学2年生まで荻窪の家で共に暮らしました。家族の間で棟方は「パパ」と呼ばれており、「いかにパパが心地よく仕事ができるか」を家族みんなが考えている、そんな毎日でした。

幼い頃から私は祖父が作業する姿を見るのが大好きで、アトリエに出入りされるのは嫌だろうなと理解するようになった頃からは、廊下を通るたびにガラス戸の向こうをのぞいては、祖父の背中を眺めるようになりました。祖父にとっては「見張られている」と感じてうっとうしかったかもしれません。

でも、何をしていてもとにかく面白い。彫る、描く、刷る、手紙を書く、本を読む……どの姿も好きでした。祖母は、目の悪い祖父が手紙や読書など仕事以外で目を使うのを嫌がっていたため、アトリエをしょっちゅうのぞく私に「パパは何してた？」とたびたび尋ねてきました。スパイのごとく「おてまみ（お手紙）かいてた」と答えていたことを覚えています。一緒に暮らしていた当時、家の近くに小さな書店があり、「頼子が本を買ってほしいと言うから」と私を口実にして、二人でよく本を買いに出掛けたことも、祖父との良き思い出の一つです。

荻窪時代はとにかく忙しく、仕事の依頼や来客が絶えませんでした。あまりに大勢が訪ねて来るので、面会日を決めて表に掲げてみたりもしましたが、祖父は構わず「どうぞどうぞ」と招き入れてしまう人でした。元来の文学好きでしたから、装丁の仕事などが来れば何でも引き受け、贈呈された本はどれも全部目を通す。見かねた祖母が何とか来客を止めようと調整しており、当時の私はといえば祖母派だったのですが、研究者となり、いま改めて「棟方志功」という芸術家を見つめると、祖父の思いも理解できる気がしてくるのが興味深いところです。

アンナ・シユゥエル著
加藤朝鳥訳 「黒馬物語」
昭和7年　春陽堂　少年文庫73
個人蔵

棟方は、昭和初期から雑誌「児童文学」の挿絵を担当するなど装丁の分野にも活動の場を広げていき、本書では素朴で味わいのある表紙カバー絵を描いている。

保田與重郎「日本浪曼派の時代」
昭和44年　至文堂

文芸評論家の保田は、昭和10年、棟方と知りあった頃に雑誌「日本浪曼派」を創刊した。本書は当時の交友や文学界の事情などを回想した作品。装丁を手掛けた棟方は、表紙や箱に墨で題字を書き、淡い色彩の肉筆画を描いている。

谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」
昭和37年　中央公論社

谷崎と出会い、深い親交を重ねた棟方は、「鍵」（昭和31年）で装丁家としても高く評価され、その後も谷崎作品の装丁を多く手掛けた。戦前の装丁は肉筆画に筆文字のスタイルが中心であったが、谷崎の本の装丁や挿絵は木版画である。

板画「柳緑花紅頌」のうち「侘助の柵」
昭和30年（昭和33年刷）
杉並区教育委員会蔵

花札の図案をもとに12カ月を描いた全12点のうちの1点。本作は11月で侘助椿と鴛鴦。昭和31年のベネチア・ビエンナーレ国際美術展においてグランプリを受賞した作品。

板画「光明妃の柵」
昭和40～43年頃
区登録有形文化財

黒刷りの輪郭線に、紙の裏から絵の具で彩色を施す「裏彩色」で仕上げられた作品。角川源義が記念陶板を制作するにあたり、その原画を棟方に依頼したもの。

倭画「福光の朝」（仮題）
昭和21年　いづみ工芸店蔵

富山県福光町に疎開していた棟方を、荻窪のいづみ工芸店店主の山口泉が訪ねた際に描かれた作品。山口は棟方の荻窪転居を支援した中心人物。棟方は自作の肉筆画を「倭画」と呼ぶ。

すぎなみビト…区内外で活躍する区民などの紹介を通して、地域の魅力を発信していきます（毎月15日号に掲載）。